



ERDE Zeitung

急増する小・中学生の外反母趾

昨年8月の全国紙に「中学生の7%は外反母趾。『予備軍』も含めれば女子では6割になっており、10年前の調査に比べ女子は2倍以上、男子は4倍と急増している」との記事が出ていたのを覚えている方も多いと思います。埼玉県医師による県内の中学校での93年と03年の足型調査の結果です。

この衝撃的な数字は、しばらくマスコミで話題となり、我が子の足を改めて眺めて心配になり、整形外科へ駆け込んだ親御さんも多いようです。私たちが出向いている整形外科でも、昨夏以来、外反母趾の小・中学生の足底板を作製することがたいへん多くなりました。

母趾が30°以上に曲がり、完全に脱臼して「手遅れ」と言わざるをえない小学生も多く、「もっと早く対処できていたら・・・」と思うこともしばしばです。

「車社会の影響で、子供の足の運動能力が低下しているのが原因では・・・」との調査した医師のコメントでしたが、確かにモータリゼーションが進展した70年代を経て、80年代には農村地域でも裸足で遊ぶ子供の姿がなくなりました。

それから10年後、事態の変化に気付いた医師がこのような調査を行った93年に、すでに女子では3割近くが、男子でも1割以上が「予備軍」だったので、この時点で、大人たちが問題を深刻に受け止め対処していれば状況は変わっていたかもしれません。

ところが、それから10年、今日の子供を取り巻く環境は、「車社会で歩かない」だけではない、驚くべき実態となっているようです。

先日放送されたNHKのドキュメントでは、小学生の骨粗鬆症や糖尿病、高血圧等の成人病が急増していること、そして、その原因のひとつとして、朝食を摂らない子供が多く、また摂る場合もスナック菓子やチョコレート、ジュースで済ます、という子供たちの朝食の実態が紹介されました。このかんのこの国のありようが、子供たちに生活の破壊と身体の崩壊を強制することになってきたようです。

そうだとすれば、この10年の中学生の外反母趾の急増(いまや男女共に大半が「予備軍」という異常な実態)も、

こうした子供たちの「身体の崩壊」のひとつの現れというべきなのかもしれません。

とはいえ、子供の外反母趾は、「予備軍」の内に早めに対処すれば目に見えて改善することも珍しくありません。問題は、足についての私たち日本人の無関心さが、外反母趾に限らず、子供の足のトラブルへの対処を遅らせてしまう、ということです。

私たちが、食生活をはじめとした子供たちの生活全般の問題を考える場合にも、おそらく足についての優先順位はそう高くはないと思われます。身体全体を支えてくれているのが足であるにもかかわらず、余程の痛みでもがないと医師の診察を受けることもありません。

外反母趾についても、子供がたまに多少の痛みを訴える程度の時に気付いて対処すれば良いのですが、我慢できなくなってから病院へというのが今でも一般的なようです。しかし、そこまで進行すると、なかなか完治することは困難です。



15歳 女子



11歳 女子



14歳 女子



13歳 男子



13歳 女子



12歳 男子

小・中学生で、すでにこんな外反母趾に・・・と、驚かれる方も多いことでしょうが、早い対処ですぐに改善が見られた例と、症状が進行しているために改善が遅い例とをご紹介しますので参考にして頂きたいと思います。